

街地-問屋町-前橋をつなぐ道路沿線の都市化がもたらされた。これらの工場移転後において、北部工場地区においては、住宅、事務所への転用がなされ、市街地内においては、駐車場の確保につながった。問屋移転後においては、金融地区が形成された。また、駅前の運輸・流通施設の移転後は、スーパー、デパート等、大型店の進出となり、市街地内、7つのデパートの配置関係から、大手前通りと、中山道の交叉する地区に、中心商店街をもたらした。しかし一部の金融地区、小売業地区を除いて、商業・業務地区は、未分化である。

富浦町における房州枇杷の農業地理学的研究

草山淳子

(1) 目的

富浦町は、房州における枇杷の特産地である。論文では、富浦町で、枇杷栽培を可能にしている条件、制限している条件を探り、枇杷栽培が、農家の経営の中に占めている位置を把握し、地域区分をすることが目的である。

(2) 枠組

第1章では自然、人文の面から、地域の概観を述べた。第2章で、房州枇杷栽培がどのように行なわれているかを述べ、富浦町内での栽培地域の違いを論じた。第3章では、第2章で述べたことから、現状の問題点と将来の展望を抜き出して、考察した。第4章で、地域区分をし、要約を第5章とした。

(3) 結果

富浦町は、東京湾に面し、北部は丘陵地で、南西部に平地地がある。夏期には、海水浴場としてにぎわい、海岸付近の漁家、農家では民宿経営が盛んである。農業では、温暖な気候を利用した花卉・栽培、枇杷栽培が行なわれている。

房州枇杷は、江戸時代に始まる出荷の歴史を持ち、斜面の多い地形を生かして栽培されている。枇杷のみの農家は見られず、民宿・花卉・花木・水稻・野菜・酪農のうちのいくつかの組合わせで行なわれている。海岸地域では、酪農を除いた他の5つと組み合わせれ、内陸地域では、民宿を除いた他の5つと組み合わせられている。それぞれの地域で、丘陵の部分で特に枇杷栽培が盛んで、花卉・花木との組み合わせ、平地の部分で、花卉・水稻・野菜との組み合わせが特徴的である。また、海岸地域は栽培の歴史が古いのに対し、内陸地域では新しく、枇杷園の拡大が進んでいる。

枇杷栽培にはいくつかの問題がある。枇杷栽培に関しては、気候条件が秀れていないので、寒害を受けやすく、生産量が不安定であること、労力が収穫期に集中して必要なため、家族だけでできる面積が小さく、しかも雇用労力を得るのが困難なこと、老木化が進んでいるが、忌地現象のため、新改植が困難であり、ソテツへの転換も見られること等である。

枇杷は、農家では、複合経営のなかに組み込まれているが、これからは、花卉・花木の比重が高くなってゆくと思われる。栽培の歴史の古く老木化の進んだ旧産地で、その傾向が強いが、現在、栽培規模も大きく、枇杷が経営の中心になっている新産地でも、やがては、同じ問題に直面する時が来るのではないだろうか。